

国内及び海外での撮影によるデジタル映画タイトルの制作と 完成までの過程

- Filmmaker Baby -

中田 平*¹・味岡 茜・井島 早稀・岩井 麻美・木村 愛・栗本 奈旺・城田 美咲・鈴木 花奈・中
村 明里・新実 佑香・三ツ矢 早希・山羽 一穂
Email: nakata@kinjo-u.ac.jp

*1: 金城学院大学現代文化学部情報文科学科 (教員と学生)

◎Key Words デジタル映画制作, 海外研修, 台本, 演出, 撮影, 編集

1. はじめに

この発表は金城学院大学現代文化学部情報文化学科所属の中田ゼミ4年生が、2011年9月末から映画用の台本作成を始めて、2012年7月にあいち国際女性映画祭にショートフィルムとして応募するに至る過程をレポートするものである。映画のタイトルは*Filmmaker Baby*である。

2. 映画制作に至る出発点

2.1 学部改組による海外研修プログラムの策定

筆者の所属する金城学院大学では、1997年に開設した現代文化学部を改組して国際情報学部とする計画が進行し、2012年から学生募集を始めた。国際情報学部は国際情報学科のみの1学部1学科で、グローバルスタディーズ専攻とメディア・スタディーズ専攻の2専攻制でスタートした。⁽¹⁾現代文化学部の国際社会学科、情報文化学科を母体としているが、より現代的ニーズに応えようと、学部生全員に外国での研修を課すカリキュラムを導入した。当初、研修先にはハワイ、カナダ、インドネシア、タイ、などが候補に上がっていたが、これらの渡航先は改組の母体だった国際社会学科での実績を前提にしていたため、メディア・スタディーズに特化した研修先を付け加える必要があった。中田は後藤昌人准教授とともにメディアに特化した研修プログラムを検討するうちに、ロサンゼルスにおけるNew York Film Academy⁽⁴⁾ (以降、NYFMと略記する)という映画の専門学校と提携した映画製作実習を中心とした研修プログラムを作ることにした。(それとは別に、台湾におけるWebコラボレーションの研修プログラムとハワイにおけるラジオとフリーペーパーの研修プログラムも加えることにした。)

2.2 映画制作プログラム

ロサンゼルスプログラムは、私にとっては映画制作という新しいメディアへの挑戦と同義である。これまで金城ポッドウォーク⁽³⁾という映像タイトルを150本以上制作してきて、テレビ的な映像制作ではそれなりの経験を積んできたと自負しているが、映画制作はズブの素人であり、果たして新カリキュラムの中核を担うに足るプログラムになるか、見当もつかなかった。何よりも、新学部がスタートする前にシミュレーションが必要だった。2011年8月1日に後藤と中田はロサンゼルス校の現地視察を行い、NYFAのロサンゼルス校の校長を表敬訪問すると共に、学校の設備などを見学した。(ニューヨークの本部校には2012年4月24日に中田が私的に訪問した。)

2.3 ロサンゼルス研修旅行

海外研修は1年生の3月、つまり2013年3月と決まっていたので、準備期間は1年半しかない。海外研修と映画制作という欲張った企画を成功させるためにはシミュレーションは絶対不可欠である。そこで、3年ゼミの授業を映画制作にあて、なおかつ3年ゼミ生と一緒にロサンゼルス研修に行くという大胆な計画を立てたのは必然性があったのだ。期間は2月29日から3月12日の13日間にした。しかし、後藤ゼミと中田ゼミの3年生の参加者の合計が20人に達しなかったため、情報文化学科の1年から3年の全員に募集をかけ、最終的には参加者数が31人に達したのは驚いた。このプログラムの持つ魅力に手応えを感じたのである。後日譚であるが、帰国後の学生への聞き取り調査でも、「帰りたくなかった。また行きたい。楽しかった。」という声しか聞こえなかったのもありがたい結果である。

2.4 NYFA のカリキュラム

1年あるいは2年の修了カリキュラムの本科をもつ NYFA は、パリ、フィレンツェなど世界各地にも短期プログラムを展開している。本学の場合は標準的な1週間プログラムをアレンジした8日間プログラムを準備してくれた。その内容は以下のとおりである。

1. Hands on Camera (合計3回) デジタル映画撮影用のカメラの説明と実習
2. Directiong⁽²⁾ (合計2回) 演出術
3. Writing (合計2回) 台本作成法
4. Production Workshop (室内ロケ、屋外ロケ、合計2回)
5. Hands on Editing (Supervised Editing, Open Editing 含めて3回)
6. Screening 上映会

New York Film Academy
8 Day Digital Filmmaking
March 2012

SECTION	DAY	DATE	TIME	CLASS	INSTRUCTOR	ROOM	DAY
Mar 8 Day Digital	Wed	29-Feb	8:50AM	LAX Arrival			Day 1
Mar 8 Day Digital	Wed	29-Feb	12:00PM	Lunch			Day 1
Mar 8 Day Digital	Wed	29-Feb	1:30PM	Orientation		Kurosawa	Day 1
Mar 8 Day Digital	Wed	29-Feb	4:00PM	Hotel Check-in			Day 1
Mar 8 Day Digital	Th	1-Mar	9:00 - 11:30	Directing I (Prof. Goto)	Art Heltterbran	Schoonmaker	Day 2
Mar 8 Day Digital	Th	1-Mar	9:00 - 11:30	Hands on Camera I (Prof. Nakata)	Erik Bianchi	Antonioni	Day 2
Mar 8 Day Digital	Th	1-Mar	1:00 - 4:00	Hands on Camera I (Prof. Goto)	Erik Bianchi	Antonioni	Day 2
Mar 8 Day Digital	Th	1-Mar	1:00 - 4:00	Directing I (Prof. Nakata)	Art Heltterbran	Schoonmaker	Day 2
Mar 8 Day Digital	Th	1-Mar	4:00 - 6:00	Universal Backlot Tour			Day 2
Mar 8 Day Digital	Fri	2-Mar	9:00 - 11:30	Hands on Camera II (Prof. Goto)	Erik Bianchi	Kurosawa	Day 3
Mar 8 Day Digital	Fri	2-Mar	9:00 - 11:30	Directing II (Prof. Nakata)	Art Heltterbran	Ford	Day 3
Mar 8 Day Digital	Fri	2-Mar	1:00 - 3:30	Writing I (Prof. Goto)	David Newman	Kurosawa	Day 3
Mar 8 Day Digital	Fri	2-Mar	1:00 - 3:30	Writing I (Prof. Nakata)	Nils Taylor	Ford	Day 3
Mar 8 Day Digital	Fri	2-Mar	3:30 - 6:30	Directing II (Prof. Goto)	Art Heltterbran	Ford	Day 3
Mar 8 Day Digital	Fri	2-Mar	3:30 - 6:30	Hands on Camera II (Prof. Nakata)	Erik Bianchi	Kurosawa	Day 3
Mar 8 Day Digital	Sat	3-Mar	9:30 - 11:30	Hands on Editing I	Blake Barrie	Menke	Day 4
Mar 8 Day Digital	Sat	3-Mar	1:00 - 4:00	Hands on Camera III	Erik Bianchi	Kurosawa	Day 4
Mar 8 Day Digital	Sun	4-Mar	10:00-5:00	Production Workshop	Art Heltterbran Eric Bianchi		Day 5
Mar 8 Day Digital	Mon	5-Mar	10:00-5:00	Production Workshop	Art Heltterbran Eric Bianchi		Day 6
Mar 8 Day Digital	Tue	6-Mar	9:00 - 1:00	Supervised Editing	Blake Barrie	Menke	Day 7
Mar 8 Day Digital	Tue	6-Mar	2:00 - 8:00	Open Editing		Menke	

New York Film Academy
8 Day Digital Filmmaking
March 2012

Mar 8 Day Digital	Wed	7-Mar	10:00 - 1:00	Supervised Editing	Blake Barrie	Menke	Day 8
Mar 8 Day Digital	Wed	7-Mar	2:30PM	Final Screening	Art Heltterbran		Day 8

Congratulations on Completing the
8 Day Digital Filmmaking Workshop!

8日間のプログラム内容

3. ゼミで映画制作

3.1 台本作成

話は前後するが、3年ゼミの後期からゼミ生11人全員

で台本作成を開始した。撮影の難易度を考慮することが台本に制約を与えないように、ストーリーには基本的に制限をつけないようにした。そのことで後に様々な困難が発生したことは事実である。その最大の難点は時間が長いことである。時間が長いのはプロット(ストーリー)が複雑なためである。

台本のプロットはこのようになっている。どこにでもいる将来の生き方がみつからない一人の女子学生が、ひょんなことからロサンゼルスにある映画会社でインターンシップをすることになる。彼女の書いたプロットが認められて映画の脚本になったからである。彼女のプロットを土台にした脚本で撮影が進行していく過程で、映画のシーンでスポンサーのクレームが出る。スポンサーの意向にそってプロデューサーが書き直しを命じると脚本家が激昂する。しかし、主人公は粘り強く解決策を探しあてて、大幅な変更なく映画を完成に導く。アカデミー賞候補にノミネートされた映画の原作者として主人公はすっかり生まれ変わるようになる。

ある意味では、NYFAの研修をそのまま題材にしたお手軽なプロットだが、ロスでの撮影の必然性を持たせるためにはピッタリのストーリーであることも事実である。

3.2 監督・俳優・スタッフ

ロサンゼルス研修の日程は、3年生がちょうど就職活動を開始する時期で、参加できる学生が井島早稀、岩井麻美、栗本奈旺の3人になってしまった。ロサンゼルス現地の俳優は別として、日本人役は必然的にできるだけ学生がやらざるを得ないことになり、この3人が主要な出演者に決まった。ただ、実際には井島早稀と栗本奈旺はゼミ長と副ゼミ長として台本作成に関わってきた。ロサンゼルスでは、井島が監督、栗本が撮影監督でありながら、俳優もやるという、いわばプレイング・マネージャーだったため、非常に重圧がかかったことは気の毒だった。撮影スタッフと一緒に参加した学生を2分して、後藤組・中田組と称して、中田組は参加者31人の中の16人を抱えることになった。監督・カメラ・音声・カチンコなどを分担した。2年生のプレゼミ組が実質的な監督とスタッフの役割を果たし、1年生も2年生にしたがって役割を果たすという、ある意味で理想的な役割分担ができたことは画期的であった。

3.3 ロサンゼルスでの撮影

ロサンゼルスでの撮影は35シーンのうちの10シーン足らずを撮影しただけである。3月4日にNYFAのビルの一つを使って丸1日の撮影を行った。演出

(mise-en-scène) とカメラ指導 (filming) は NYFA のインストラクターが、また、通訳は現地在住の日本人俳優がしてくれた。1 年間又は 2 年間のカリキュラムでは 8mm、16mm、35mm フィルムカメラから勉強するが、われわれのような短期プログラムではそれを大幅に端折って、最初から SD カード 2 枚 (1 枚はバックアップ) を実装したデジタル映画用カメラ Panasonic AVCCAM Solid-State Camcorders AG-AC160 を使った。



室内の撮影風景 (NYFA のピルの室内)

室内撮影では照明係が照明設定のサポートもしてくれた。音声は通常はカメラマン自身が兼務するようだが、この撮影では学生スタッフがいたので、音声は学生が確認することにした。われわれの映画では映画監督役のアメリカ人俳優と現地スタッフ役の俳優が必要だったが、NYFA が手配してくれたのと、インストラクターと照明スタッフがその場で急遽出演を頼んでも快く引き受けもらった。これも映画人ののりの良さだろうか。



ユニバーサルスタジオのバックロットでの撮影風景

さらに、翌日の 3 月 5 日には Universal Studio の back lot での屋外撮影を 1 日行った。普段ならユニバーサルスタ

ジオのバックロットツアーとしてオープンバスで車上から風景として眺める場所で実際の撮影をすることは学生ばかりか私たち教員も興奮するビッグチャンスだった。バックロットのニューヨーク・ストリート一体が撮影場所として提供され、プロの撮影隊のようにツアー客に写真を撮られながらの撮影になった。監督役の俳優は出番が終わっても撮影終了まで 1 日中付き合ってくれるほど打ち解けた雰囲気でも撮影が終了した。

3.4 編集作業 (Editing)

映画撮影が終わればこれで修了ということにはならない。編集作業が残っている。ポストプロダクションは NYFA の教室で、全員がシーンを分担して編集作業を行った。普段はパソコンを苦手になっている学生も、同じように分担作業をこなしている姿は感動的なものがあった。編集環境は iMac と Mac Pro が全員分用意され、すべての Mac に FinalCut Pro がインストールされていた。映画の専門学校だから設備が違うのだとは分かっているが、自分の大学で同じような環境が整備されれば、学生のスキルが飛躍的にアップするのに、ととても残念な思いをしたのも事実である。



NYFA の教室での編集風景

3 月 6 日をフルに使い、翌 7 日の午前中で編集を終えたものを、インストラクターがすべてシーケンスを集めて最後の仕上げをして撮影分のシーン全体をショートムービーとして仕上げてくれた。このときのインストラクターの編集技術はほれほれする程のスキルと知見がみえた。

最終日の午後、後藤組と中田組の 2 つのムービーを鑑賞する Screening を終えて、学生一人ひとりに修了証書を渡す儀式を経て、ロサンゼルス映画研修は修了となった。

4. 帰国後の作業

4.1 日本での撮影

ロサンゼルスでの撮影は35シーンのうちの10シーン足らずを撮影しただけである。残りの3分の2以上は日本で撮影しなければならない。この論文を提出する期限の6月15日現在、ゼミ生たちは就職活動の合間をぬってタイトなスケジュールで撮影を続行している。4年生になってからの5月6日と6月3日に名古屋市瑞穂区にあるモデルハウス⁹⁾をご好意で拝借して日本及びロサンゼルスのシーンを撮影した。また、PCカンファレンスのこのドラフトの締切り後の6月21日に、金城学院大学の教室で100人を超える学生が出演するシーンを撮影することになっている。さらに、6月30日にも春日井市にある写真スタジオを借りて残りのシーンの撮影を予定している。

4.2 編集作業

ロサンゼルスでのNYFAでの編集は、研修参加者のスキル獲得の時間としてまことに有効な素材となった。しかしながら、この映画の編集は本来、4年ゼミ生の卒業制作なので、撮影したすべての素材をロス組（出演者）以外のゼミ生が分担して編集作業に当たることにした。こうした編集の分担作業が実質的な共同作業の実態になるからだ。チャンスがなくてロサンゼルスでの研修に参加できなかったゼミ生と参加学生との間に生まれる取り組みに対する温度差を縮めるためにも重要な配慮だと考えた。現在、撮影素材をゼミの時間を使って分担編集をしている。

4.3 撮影場所と出演者の手配

映画とはまことに手間と労力と金がかかるものであることをつくづく思い知らされたのは、ロサンゼルスでの撮影より、むしろ日本での撮影に関してである。ロサンゼルス以外のロケ場所は、少なくとも4つは必要である。大学というのはどこかに撮影場所があるもので、いくつかはどうか利用できることがわかった。しかし、映画にリアリティを付与するには、やはり数カ所の撮影場所は別に求める必要が生じてくる。映画で町おこしなどのプロジェクトが困難を極める原因の1つはこの撮影場所の確保の困難ではないかということは想像できる。

2つめは出演者の手配である。今回の映画では、主要な役はゼミ生の3人が担ってくれた（が、いつでもそううまく行くかは水モノだ）。この映画では、中田が懇意にしている劇団の好意で、主人公の母親役の女優さんに出

演してもらうことができた。また、我が大学が女子大であるということがこうした総合芸術において不利に働くことがあるのは、男子学生がいないことである。そのため、同じく中田が懇意にしているモデル事務所から推薦を受けて、女優さんに出演してもらう必要があった。

第3の問題は撮影のための機材である。できればNYFAと同じようなPanasonicのデジタル映画用カメラがあればよかったが、我が大学の機材はSonyのminiDVテープのビデオカメラだった。ただ、このカメラは24フレームのフィルムフォーマットでminiDV撮影した素材を取り込んで編集することができたのが幸いだった。しかし、編集環境がMacでソフトがFinalCut Proであることは大変な利点になった。

5. あいち国際女性映画祭への応募

さて、あいち国際女性映画祭¹⁰⁾とはあいち男女共同参画財団が主催するイベントで、女性監督によるショートフィルムを募集して映画部門への女性の参加を促す催しである。映画製作の当初は、ロサンゼルスでの海外研修を目標にした実験であったが、帰国後、財団からの要請を受けて、この映画祭に学生たちが作った作品でエントリーすることにした。現在、鋭意、撮影及び編集に取り組んでいるところである。

6. おわりに

映画祭での入賞は運を天に任せるしかないが、4年中田ゼミは、2013年2月の現代文化学部情報文化学科の卒業展という卒業制作及び論文発表会に向けて、PCカンファレンスのポスター発表後も最後の仕上げに全力を上げることだろう。また、映画祭終了後も、さまざまな機会をとらえてわれわれの作品を上映することで、映画の魅力を伝える伝道師の役割を果たすことができれば幸いである。

参考文献

- (1) <http://www.kinjo-u.ac.jp/kgm/>
- (2) 映画の演出方法などについては、例えば日本語で書かれた次の本が役に立つ。今泉容子：“映画の文法—日本映画のショット分析”，彩流社（2004/02）
- (3) <http://podwalk.kinjo-u.tv/>
<http://www.youtube.com/user/podwalkkinjo>
- (4) <http://www.nyfa.edu/japanese/>（日本語サイト）
- (5) <http://www.fuyuto.net/sintiku/annai/index.html>
- (6) <http://www.aiwff.com/2012/>